研究論文

造語成分「人（ニン）」と「人（ジン）」の特徴と熟語の意味

大　槻　美智子

キーワード：字音、「人（ニン）」、「人（ジン）」、結合関係

はじめに

「人」には、ニン（呉音）・ジン（漢音）の二種類の字音がある。このように漢字が複数の音を持つことは、珍しいことではない。しかし、「案内人（ニン）」「管理人（ニン）」の人はニンと読むがジンとは読まないとか、逆に「外国人（ジン）」「民間人（ジン）」の人はジンであってニンとは読まないという事実は、興味深い。ニンと読む場合と、ジンと読む場合には何か規則めいたものがあるのだろうか。この問いについては、野村 1977 がすでにそのおおかたを明らかにし、次の 4 項目にまとめている。

①ニンは和語とも結合するが、ジンは結合しない。
②ニンは用言類の語基としか結合せず、ジンは体言類および相言類の語基としか結合しない。
③ニンと結合する語基はすべて〈動作〉をあらわし、ジンと結合する語基は、〈場所〉〈時〉〈活動〉〈精神〉をあらわす語基および相言類の〈状態〉をあらわす語基としか結合しない[1)]。
④ニンは〈数詞〉と結合し、ジンは〈地名〉と結合する。その逆はない。

ただし、①には、「一・二の例外（たとえば、「読書－人（ジン）」「暇－人（ジン）」など）」があること、上接語が漢熟語の場合、「二字漢語の後部分となる『人』にも、このような傾向はあるが、これほど、はっきりした対立はない」という指摘もしている。よって、野村 1977 が考察対象として例示している漢語は、次のようなものである。

人（ニン）……案内－・管理－・見物－・支配－・使用－・通行－・貧乏－・保証－・料理－
人（ジン）……外国－・財界－・自由－・社会－・知識－・文化－・民間－・野蛮－・有名－

つまり、上接語が和語の場合と漢熟語の場合では、若干性質が異なり、①～④が成立するのは、和語なら制約なく、漢語なら上接漢語が二字以上の場合という条件付きということになる。

筆者は、平成 25・26 年度「日本語学演習」でニン・ジンの使い分けの問題を扱ったことを契機として、野村 1977 の①～④を検討した。結果、この①～④は傾向として十分に認められるものであるが、語基と語基の結合関係を詳しく検討することで、文のアスペクト・ヴォイスと同じ意味関係が語構成においても成立していること、そして、それぞれの熟語に固有の結合関係が、熟語の意味にも、それぞれ固有の特徴を与えていることを指摘したい。

さて、先の②③の内容は互いに関連している。同趣のことを別の側面から言っていると言えなくもない。

たとえば、「立会い人（ニン）」「管理人（ニン）」の傍線部は、用言語基とも体言語基とも言える[2)]が、ニンへのかかり方が「立会う人」「管理する人」のように、〈動作〉で結びついている(③)ので、結局、用言語基だ(②)と言えるということになる。つまり、体用両用の性質を持つ語基は、次の「人」との結合の仕方によって、どちらか一方に決定される。それは、語基の性質よりも結合の意味的関係の方が優先するということであろう。

ジンについても同様のことが言えそうである。ジンと結合する語基は、後述するように、そのほとんどは体言・相言類であり(②)、そのこと自体が、〈場所〉〈時〉…〈状態〉の意味をあらわすという記述(③)と表裏をなす関係なのである。

以上のことをふまえて、先の②③については、語基自体の性質と結合の意味関係を別々に論じるのではなく、次のようにニンとジンとに分けて整理し直すことにした。改変したものを、②*③*とする。

②*ニンは用言類の語基としか結合せず、ニンと結合する語基はすべて〈動作〉をあらわす。

③*ジンは体言類および相言類の語基としか結合せず、ジンと結合する語基は、〈場所〉〈時〉〈活動〉〈精神〉をあらわす語基および相言類の〈状態〉をあらわす。

また、以下の記述において、「人」に上接する、「交渉」「経済」など二字以上の漢熟語を複合語基、「新」「聖」などの漢字一文字を単一語基と称する。和語についても、「稼ぎ」「遊び」などを単一語基、「請け負い」「差し出し」などの複合語を複合語基と称することにする。

ニン・ジンの用例は、①「日本語学演習」の時間に学生から出たもの、②広辞苑の逆引き索引で得た語をベースに、「現代日本語書き言葉均衡コーパス（少納言）」で用例が見られるものを対象とした。

ただし、用例が歴史小説や古文書にのみ見られる用語は、考察の対象からはずし、それらの語例は〈注 7〉〈注 10〉に記した。一方、法律用語は、日常よく耳にするものも多く、また日常語が法律用語と重用されている場合も多いので、この種の語は検討例の中にいれた。以上のような手続きをとったのは、現代語でよく使用されるものの実態を観察するためである[3)]。

なお、本論では、「複合語基＋人」を考察の対象とするため、「小・役人」「御・家人」「一・個人」「七・賢人」「不・美人」「賢・夫人」など、人を含む二字熟語にそれを修飾する語が付いていると解されるものは含まない

1. 結合語種

① 和語は、ニンとは結合するが、ジンとは結合しない。

野村 1977 があげた、ニン・ジンの第一番目の特徴である。以下に和語と結合する、ニン・ジンの例をあげる。

1）和語

単一語基＋ニン

A　預かり人　遊び人　稼ぎ人　勤め人　雇い人

C　怪我人

複合語基＋ニン

A　受取り人　請負い人　裏書き人（証券に裏書きをする人）　差出し人　指図人　仕掛け人　下請け人　支払い人　立会い人　付添い人　取扱い人　仲買い人　仲立ち人　荷扱い人　荷受け人　荷送り人　引受け人　引取り人

C　手形振出し人（手形を発行した人）
D　名宛て人
E　水先人（船の水路の案内をする人）

単一語基＋ジン　暇人[4)]
複合語基＋ジン　用例ナシ

ニンのところに付したACDEなどの記号は、語基間の結合関係を分類したものであり、「漢語＋ニン」において使用する記号と共通である。詳しくは、次章以降で説明する。

さて、今回の調査では、ジンが和語と結合する例は、野田1977の指摘通り、「暇人」以外には見当たらなかった。一方、ニンには和語との結合例が多く見いだせた。①の指摘通り、ニンとジンの棲み分けが見て取れる。

ニン・ジンは冒頭にあげた例からもわかるように、漢語とも結びつくので、表にすれば次のようになる。

表1

	ニン（呉音）	ジン（漢音）
和語	○	×*
漢語	○	○

*は例外（暇人）があることを示す。

このように、ニンが和語と結びつくのは、同じ漢字音であっても、古く日本に入ってきたニンの方が、和語との親和性が高いと認識されたからと考えられる[5)]。

2. 語基の性質と結合関係

2–1 「一人（ニン）」

②*ニンは用言類の語基としか結合せず、ニンと結合する語基はすべて〈動作〉をあらわす。

上記の特徴について和語と漢語に分けて検討する。まず和語である。

1）和語

和語の複合語基については、前章1（p.2–3）にあげたので、参照ねがいたい。意味が分かりにくいと思われるものには括弧内に注記を施している。

まず、**ニンと結合する語基がすべて用言類である**という点については、どうだろうか。ニンと結合する和語は「怪我人」「水先人」を除いてすべて動詞の連用形である。その意味で、これらは体用両用語基だが、「人」へのかかり方に〈動作〉性が見られれば用言語基とすることに問題はない。また、「怪我」も体言であると同時に「怪我（を）する」と言えるので、用言語基の性質を持つものである（「水先」については後述する）。

そこで、次に、「人」へのかかり方を見てみると、その過程で、求める〈動作〉性をさらに詳しく分類することができた。それが、語例のはじめに付した、ACDなどの記号である。Eには例外と見られるものを分類した。A、C、Dの詳細は次の通りである。

A：「預かり人＝預かる人」「受取り人＝受け取る人」のように、**「○○スル人」の関係を持ち、「人」が動作主であるもの。**
C：「怪我人＝怪我（を）した人」「手形振出し人＝手形を発行した人」のように、**「○○シタ人」の関係を持ち、「人」が動作主であるもの。**
D：「名宛て人＝名宛てにされた人。名を指定された人」[6)]のように、受動態**「○○サレル（タ）人」の関係を持ち、「人」は受動者であるもの。**

以上のように、ニンと結合する和語語基は、具体的な〈動作〉性――スル・シタ・サレル（サレタ）のいずれか――をもって、ニンと結合しているところから、用言語基であると言える。

先に保留した、「水先人」の「水先（みずさき）」は、どうだろう。「水先」の意味としては、国語辞典などによれば、「水の打ち当たるところ／船が進み行く水路」ということで、唯一体言語基と認めざるを得ない。

ただ、歴史的に、「水先」がメトニミー的に「正しい水路を教え導くこと／人」という、動作性の概念を有していた可能性も捨てきれない。たとえば、江戸時代には、「水先」だけで、「正しい水路を教え導く人」（日本国語大辞典）の意味があったようである。ただ、「水先」の語誌については、未だはっきりしない部分も多く、用言語基であると積極的に認めることはできなかった。よって本稿では、例外もしくは保留扱いにしておきたい。

野村 1977 が「水先人」のような例をどう扱ったのかは不明だが、それ以外は、**「ニンは用言類の語基と結合して、〈動作〉をあらわす」ことが確認できた。また、その〈動作〉関係は、和語では、A、C、D の三種がみられた。**

次に、漢語の場合を見てみよう。

2）漢語[7]

A　案内人　運送人　看護人　監査人　*管財人
鑑定人　監督人　管理人　後見人　公述人
交渉人　口上人　*公証人　控訴人
小作人[8]　指図人[8]　細工人　支配人
*借家人　受信人　商売人　上告人　選挙人
世話人　相続人　集配人　出頭人　代書人
代理人　賃借人　通行人　通訳人
手形所持人　同居人　*渡世人　配達人
弁護人　編集人　奉公人　補佐人　保証人
発起人　料理人

B　通行人　同居人　奉公人　小作人

C　苦労人　*下手人　*発頭人（事を企て起こした人）　*張本人（事件を起こす一番もとになった者）　*犯罪人

D　参考人　使用人　被告人　被控訴人
被後見人　被上告人　被選挙人　被相続人

E　*名義人　*筆頭人　*貧乏人

漢語複合語基を、ニンとの結合関係によって A〜E に分類した。A から順に、語基の性質と「人（ニン）」へのかかり方を見ていこう。

A　「〇〇スル人」

A には、「〇〇スル人」の関係で熟語を構成しているものを分類した。たとえば「案内人」なら、「案内スル人」、「看護人」なら「看護スル人」といったものである。

ただ、この中には、「〇〇スル」とサ変動詞化できない語も存在している。A グループでいえば、「管財・公証・借家・渡世」（*を付した）だが、これらがサ変動詞化しないのは、それ自身が、すでに動詞の意味を持っているからである。

「管財」は財物を管理すること、「公証」は（法律関係の事項を）公に証明すること[9]なので、熟語としては、「財物を管理する人」「公に（ある事項を）証明する人」というように、動詞語基として働いている。

「借家」は、「家を借りること、また、借りて住む家」（広辞苑）で、体用両用の語基だが、「借家人」では「家を借りる人」のように用言語基として働いている。また、「渡世人」はもともと「無職渡世の人」というところからきている（日本国語大辞典・広辞苑など）語であるらしく、「無職で世の中を渡る（生活する）人」という意味である。

このように、A に分類したものは、語基としては用言ばかりでなく体用両用のものもあったが、すべてこのように「〇〇スル人」（人は動作主を表す）という関係で結びつき、熟語を形成していた。ここに属する語例は多く、A グループは、ニンが形成する熟語の典型群である。

さらに、A グループの語を見てみると、そのすべてが、「ある役割や役職」を意味する熟語であることがわかる。これは、スルという基本形の、時間を超越するもしくは未来を表すという性格を反映しているからだと考えられる。ただし、役職を表わす語がすべて「スル」型だというわけではない、それについては後で触れる。

B 「○○シテイル人」

「通行人　同居人・奉公人・小作人」などは、A としても B としても用いられるので（下線を引いた）、どちらにも所属させている。たとえば、「通行人・同居人」の例をあげて説明すると次のようになる。

(1) 僕に与えられたのは、通行人の役だった。
(2) 土曜日の午後なのに通行人の姿はほとんど見かけない（重松 2000）。
(3) 大通りに出ると急に通行人が増え、僕は上手く走れないようになった（村上 1988）。

(1) は「通行人」という役柄を指していて A、(2)(3) は「今、通行している人」（継続状態）の意味で B の属する用法である。同居人の場合も、例 (4) は A であり、例 (5) は B に分類される。

(4) 標準契約書においては、貸主、借主、管理業者及び同居人の氏名等を一覧できるように、頭書部分を設けている（「賃貸住宅標準契約書（改訂版）」解説コメント）。
(5) 同居人つまり子どもたちの父親のピアノの練習は、基礎を無視した独学自己流です（伊藤 1999）。

奉公人・小作人も、今現に「奉公／小作している人」の場合と「奉公人をさがしている」「小作人になる」など役割名称である場合とがある。そこで、このように A・B を区別するとともに、両方に使われる例があることを示した。

このように、A・B に見られる「スル・シテイル」は、動作のアスペクトを反映している。「スル」は将来的にその動作が行われるか、もしくはそのように決まっている場合に使われるが、熟語においてもその意味は機能し、A に分類される熟語は、なんらかの役割や職業を表わすものになっている。一方、B は、その人の現在の情況を表わしていて、社会的に決められた役割や職業を意味していない。

シンタクス上のアスペクトが語構造の中にも現われるという点で、A・B の相違は興味深い。

ところで、シテイルは動詞によっていくつかの意味を持つことが知られている。たとえば、『基礎日本語文法　改訂版』(pp.114–115) には、本稿と関係する範囲で取り出せば、次の三つの用法が書かれている（記号番号は筆者が仮に付けた）。

a 動きの継続状態
　太郎は音楽を聴いている。
　太郎は今テレビを見ている。
　花子は先月からずっと小説を書いている。
b 動きの結果状態
　家の前に大型トラックがとまっている。
　部屋の灯が消えている。
　戸が開いている。
　高津さんは先週から神戸に来ている。
c 経験・経歴
　花子は 2 度カナダを訪れている。
　日本はこの種目で 1960 年と 1968 年に金メダルをとっている。

B に属する、「通行人・同居人・奉公人・小作人」のシテイルは、a の用法である。さらに、

『基礎日本語文法　改訂版』（p.116）には、「時間的な限定が希薄になると、対象の属性（性質や特徴）を表す」という指摘がある。通行人以外はこのような場合に該当すると思われる。

C 「〇〇シタ／シテイル人」

「苦労人・犯罪人・下手人・発頭人・張本人」の上接語基は、「苦労」は苦労スルと言えるし、「犯罪・下手・発頭・張本」はそれ自身が動作性を有する語であるので、いずれも用言語基である（「苦労・犯罪」は体言の性質も持っている）。犯罪以下の語は説明が必要かもしれない。

「下手」は「物事にみずから手を下すこと」（日本国語大辞典）、「発頭（ほっとう）」は「事を起こす、企て起こすこと」（同上）であり、「西光が陰謀を発頭した為めであるかのやうな事を云ふ」（菊池寛 1921「俊寛」）のようなサ変動詞の例も見える。「張本」は、「悪事やたくらみや事件などを起こすもとになること」（同上）である。

これらの語基は、「過去にその行為を行った人」という関係で、熟語を構成している。すなわち、「下手人」は「自ら手を下して人を殺した者」（広辞苑）、「発頭人・張本人」は「事件を起こした者」、「犯罪人」は「罪を犯した者」という具合である。以上から、C の語例はすべて〈動作〉を表す用言語基であり、すべて「〇〇シタ人」という結合関係を持っていると言える。

ところで、このシタは動作が過去のものであることをあらわし、「過去にその行為を行った」という意味を通して、〈経歴・経験〉を表わしていると言えそうである。

たとえば、「苦労人」とは、現在はそれなりの地位や立場にいるが、昔相当な苦労をしたために、世の中の諸事情や人情に理解がある人のことをいうのであって、今なお苦労の中にある〈継続状態〉でない。

（6）登勢は気づいて、あ、螢がと白い手を伸ばした。花嫁にあるまじい振舞いだったが、仲人はさすがに苦労人で、宇治の螢までが伏見の酒にあくがれて三十石で上ってきよった。船も三十石なら酒も三十石、さア今夜はうんと……、飲まぬ先からの酔うた声で巧く捌（さば）いてしまった。（織田作之助「蛍」）

シタをシテイルに置き換えても、上記 c〈経験・経歴〉の意味が顕著である。

「犯罪人・下手人・発頭人・張本人」おいても同様のことが言えるだろう。同じテイルでも、B のテイル（継続状態）とは異なることに注意しておきたい。

このように、「〇〇シタ／シテイル（経験）」という意味関係を持つものを C に分類したが、和語では、「怪我人」「手形振出し人」がここに分類できることは先に述べた。このうち、「手形振出し人」は、役割を表す語として機能している。

D 「〇〇サレル人」

ここに分類したのは、「使用される人」「参考にされる人」「告訴される人」など、受身的関係で結ばれているものである。「告訴される人」の場合は、「被告」という形で受身であることが明示されている。他にも「被〇〇」というタイプの語を多く拾うことができた。

今まで検討してきた、A〜C のニンは、上接語基で表わされる動作の動作主であった。「管理人」で例示すると、

動作主 X が〈管理する〉その人（X）

と表わすことができる。

一方、D は、「使用人」でいうと、

動作主 X が Y を〈使用する〉その人（Y）

という関係になる。つまり、D では対象語にあたる部分が「その人」となる構造なのである。

先に見たように、和語にも、「名宛て人」とい

う受身構造の語が存在していた。これらも含めて、被動作という〈動作〉を表す用言語基ととらえることができるだろう。

また、D に属する語はすべて、役割や役職をあらわしている。被動であるという点が異なるだけで、A と同じく基本形であることから、時間を超越した意味を表すのだと考えられる。

E　その他

ここには、なぜニンと結合しているのか、現時点では説明がつかないものを集めた。

「貧乏人」の「貧乏」は、名詞・ナ形容詞として使用できるだけでなく、サ変動詞としても使用できる。

(7) そんな金を使っていたら、今に貧乏するぞということを皮肉っているんです（浅利 2000）。

つまり、体・相・用を兼ね備えた語基である。そして、「貧乏な人」「貧乏の人」「貧乏している人」、いずれの結合も可能である。他のニンの例から考えて、この関係を「貧乏している人」と認定し、その語基を用言語基とすることはできるだろう。しかし、それを躊躇させるのは次の二点である。

ひとつは、アスペクト的に、〈結果状態〉を表していること、これはむしろ、次のジンの特徴である。そしてもう一点、「貧乏人」は、社会における種別を表すという側面も持っており、この意味もまた、ジンに特徴的なものなのである。以上のことから、貧乏人はニンの中では例外とすべきではないかと考える。

次に、「名義人」「筆頭人」は、いずれも体言語基である。それでも、ニンと結びつくのはなぜなのだろうか。

「名義人」は、「名義の人」では、意味関係がよくわからない。「形式上、名前を書類などに出している人」と解して、〈動作〉をみとめることもできるかと思うが、語構成において、体言語基がなぜこのような動作性の補足を可能とするのかというメカニズムを明らかにできない。

次の「筆頭人」に至っては、「筆頭（＝名を書き連ねた中の一番目）の人」というように、動作性の補いがなくても、名詞修飾として十分に成り立つのである。

このように、語基の種類と〈動作〉という概念だけでは、名義人・筆頭人の人をニンと読むことの理由は説明できない。ただ、ひとつ考えられるとすれば、この二語は、ある役割を意味しているということである。とすれば、語基の種類や結合関係に関わりなく、ある役割・役職の意味をもたせるためにこそ、ニンが選ばれたということになる。

ニンが形成する熟語においては、役割・役職を表す語例が多く、ニン熟語の代表的な用いられ方という認識があってもおかしくない。語形成は、語基の文法的性質や結合のあり方だけで（一般的規則としては認められるとしても）、成立するものではないことを教えてくれているように思う。

野田 1977 は「ニンは用言類の語基としか結合せず、ニンと結合する語基はすべて〈動作〉をあらわす」としたが、「名義人」や「筆頭人」についてはどう考えたのだろうか。

E の三例以外では、ニンと結合するのは、能動・被動の別はあるにせよ、漢語・和語のどちらにおいても〈動作〉を表す用言語基であることが確認できた。また、〈動作〉の、A スル形、D サレル形は、時間を超越する用法を持つ基本形であるため、役割や役職を表す語が属すこと。B シテイル形では、動きの継続状態の意味を持つ語が属し、C シタ・シテイル形では、経験者を意味する語が形成されることを確認した。

2–2 「ー人（ジン）」

③*ジンと結合する語基は、〈場所〉・〈時〉・〈活動〉・〈精神〉をあらわす語基および相言類の〈状態〉をあらわす。

ジンは和語とは結合しないことは先に見た通りなので、ここでは、漢語、特に複合漢語語基[10]について検討していく。

野村 1977 は、〈場所〉〈時〉〈活動〉〈精神〉そして相言類の〈状態〉という分類をしているが、具体例は示されていない。そこで、まず語基とジンとがどのような関係で結びついているかによって、A・B に分類し、さらにその中を下位分類した。

A〈所属〉「〇〇ノ人」

a　国名[11]：中国人　韓国人　日本人（アメリカ人　アラブ人　インドネシア人）

b　地域：外国人　異国人　異邦人　異星人　宇宙人　火星人　関西人　西洋人　南蛮人

c　領域：経済人　芸能人　民間人　社会人　一般人　国際人　職業人　都会人　文化人

d　時間：原始人　縄文人　現代人

B〈状態〉

a「〇〇（的）ナ人」

器用人　風流人　自然人　自由人　著名人　有名人　野蛮人　未開人　文化人

「〇〇ノアル人」

知識人　常識人　器量人

「〇〇ノ・デアル人」

普通人　紅毛人　君子人

「〇〇人」

未亡人

「〇〇スル人」

読書人

b〈結果状態〉「〇〇シタ／シテイル人」

帰化人　渡来人

ジンと結合している語は、一見して、A に体言語基、B に相言相当の語基が来ていることが見て取れる。これは、用言語基と結合するニンとの大きな違いである。ただ、Ba「読書人」や Bb の「帰化」「渡来」のような用言語基のあることが問題になるだろう。これについては、後述する。

A は、上接語基とジンの間に連体格助詞ノが入り、その人が所属する〈国〉〈地域〉〈領域〉〈時間〉を表わすものである。A の ab は、野村 1977 の〈場所〉、d は〈時〉、c は〈活動〉ということになるだろう。本稿では、c を活動の領域を示すと考えてこれらを〈領域〉に分類した。

一方、B には、「ある〈状態〉の人」を意味するものを分類した。野村（1977）の〈精神〉は B の「自由人」などがあてはまるのだろうか。相言類の〈状態〉というのは、主に、B の a に分類したものを指していると考えられる。また、Ba のものは、結合の際に現われる語尾の違いで何種類かに分かれるので、それを示しておいた。

「未亡人」は特別な語尾を必要としないが、それはこの「未亡」自体が連体修飾句の性質を持っているからである。「未亡人」は、「未だ亡びざる人[12]」という関係で結合している。

ほかに説明が必要な語は「文化人」であろう。「文化人」を Ac と Ba に分類した（下線を付した）のは、二つの意味を表わしているとみたからである。「文化（＝学問や芸術などの分野）の人」と見れば Ac であり、「文化的な（＝知識・教養のある）人」とみれば、Ba となる。

さて、用言語基にもなれる「読書」「帰化」「渡来」が、ジンとどのように結合しているのかを検討しなければならない。

まず、「読書人」は、野村 1977 が結合する語基としても、「読書する人」という意味のつながりとしても、「人（ジン）」とは結びつかず、例外としているものである。

『広辞苑』には次のようにある（傍線、筆者）。

①読書を好み、よく書物を読む人

②中国で科挙により官の資格を得たもの、またそうした家柄の階層。士大夫。ひいては一般に、知識人・学者

今日では、『読書人』という雑誌も発行されていて、主に、②の知識人の意味で使っているようである。

(8) ドイツにおいて『読書人の没落』（リンガー）が語られるように、フランスにおいても古典の教養にもとづくエリート（渡辺 2001）

(9) インテリや読書人を充足させる新しい文化が形成されつつあった（石堂 2004）。

つまり「読書人」とは、社会の中で、読書を好む一定の層（知識層）を指していることがわかる。

「読書」は体用両用語基であるから、必ずしも〈動作〉の意味で「人」と結合しているとは限らない。しかし、「読書人」が「読書する人」という〈動作〉性でもって「人」を修飾していることは認めざるを得ない。これは、ニンの特徴である。では、やはり、野村 1977 の言うように例外なのだろうか。そう即断するのをためらわせるのは、熟語として完成した時に、それが何を意味しているかと言うことである。

ニンが動作性語基と結びつき「〇〇スル」の意味で結合した場合、生まれた熟語が意味していたのは、語基の種類が用言とは限らなかったが、すべて、ある役割名や役職名であった。

一方、ジンが作る熟語は、社会における人々の種類や層を意味している。「読書人」が「ジン」と読まれているのは、社会の中の一定の層を表わしているからであり、これを「読書人（ニン）」と読むと、どうしても〈読書する役割〉を担うという感じをぬぐえないのである。「読書家」という語もあるが、「あの人は読書家です」という時、それは個人レベルでそういう特徴を持つ人という意味になるだろう。

「読書する＝知識がある」という〈状態〉的な意味に、メトニミー的に転移したという解釈も成り立つかもしれないが、それに加えて、「読書する人＝知識人」という、社会における一定の層に属する人を意味させるために、ジンが選ばれたということが考えられるのである。

先に、「名義人」「筆頭人」が役職を意味するゆえにニンと読まれたのではないかと考えたが、それと同じことが言えるのではないだろうか。

最後に、「帰化人」「渡来人」を考えて見よう。「帰化」「渡来」は体用両用語基である。しかし、「帰化シタ／シテイル人」「渡来シタ／シテイル人」というように、結合部に「シタ・シテイル」が入ることから、用言語基として働いていることがわかる。

また、「シタ／シテイル」にも置き換えられることから、「人（ニン）」C に分類した「苦労人　下手人　発頭人　張本人　犯罪人」などと比較することが有効だろう。同じ「シタ・シテイル」で結びついているが、何か違いはあるのだろうか。そこで、日常的によく使われる「苦労人」を代表にアスペクトの意味を比較してみた。それが、次の（表 2）である。

表 2

語例 ＼ 意味関係	ニン	ジン	
	苦労・人	渡来・人	帰化・人
スル人（未来・役割）	×	×	×
シタ人（過去の行為）	○	○	○
シテイル人（継続状態）	×	×	×
シテイル人（結果状態）	×	○	○
シテイル人（経験・経歴）	○	×	×

この表は、「苦労・渡来・帰化」と「人」の間に、左の縦行の言葉を入れて行くと、それぞれ（　）に示した意味関係で結ばれるということを示している。特にシテイルの意味は、先にあげた、『基礎日本語文法　改訂版』の分類を参考にしている。

これを見れば、二群の語性の違いはシテイルにおいて明らかである。

「苦労人」が、経験という意味を有しているのに対して、「渡来人」「帰化人」は、「あの人は渡来人（日本に渡来している人）です」「あの人は帰化人（日本に帰化している人）です」のように、渡来・帰化シタ結果、現在もその状態が続いている人（または人々）を意味すると言える。

さらに、この二語は、いつからいつまでの状態というような時間的な限定が希薄になっていると言える。このような条件のもとでは、B の「同居人・奉公人」などが〈継続状態〉から対象の属性を表したように、〈結果状態〉からも、属性を表す用法へと移行するということが、やはり『基礎日本語文法　改訂版』（p.116）に、指摘されている。

このように、ジンと読む場合は、上の語基が動作性のものであっても、〈状態〉の意味で「人」に結合しているということが言えるのである。

そして、さらに付け加えれば、「苦労人・下手人・犯罪人・発頭人・張本人」が個人のありかたおよびそこから導き出される役割の名であるのに対して、「渡来人・帰化人」は、社会におけるある層をなす人（人々）を意味していることも「人（ジン）」の大きな特徴として付け加えるべきなのだろうと考える。

3. 結合する語類

④　ニンは〈数詞〉と結合し、ジンは〈地名〉と結合する。その逆はない。

この特徴については、野村 1977 の指摘の通りであろう。

〈数詞〉が「人」と直接結合するのは、三百人・五人など、複合・単一語基の区別なく、すべてニンである[13)]。もちろん、「七・賢人」「一・個人」のように、二字熟語（賢人・個人）に数詞がついた場合は、数詞とニンとの結合が間接的であり、考察の対象外である。

〈地名〉がジンにのみ結びつくのは、上掲の例を見れば、明らかである。ジンの名詞性語基との強い結びつき、地名に属する集団を表わすという意味の上から言っても、当然の結果であると言える。

まとめ

和語（単複両語基）・漢語（複合語基）が、ニン・ジンと結びついて熟語を構成するとき、どのような規則があるのかということについて、野村 1977 を検証してきた。

その結果、次の二点は、問題なく認められた。

《結合する語種》

①ニンは和語とも結合するが、ジンは結合しない（ただし、「暇人」を除く）。

《結合する語類》

④ニンは〈数詞〉と結合し、ジンは〈地名〉と

結合する。その逆はない。

考察の中心となったのは、②*③*である。考察の結果、語基と結合に関する②*③*の文章（規則）は、次のようにあらためる。さらに、ニン・ジンの熟語としての意味にもそれぞれの特徴があったので、それを付加して以下に示した。

②ニンは、用言語基と結合して、〈動作〉をあらわす。ニンが形成する熟語は、それぞれのアスペクト的結合関係と相関している。

結合の仕方、相関関係の詳細を表3にまとめた。

表3

	語 例	アスペクトによる結合関係		熟語の意味
A	管理人	スル	超時	役職・役割
B	通行人	シテイル	継続状態	継続動作者
C	苦労人	シタ・シテイル	経験・経歴	経験者
D	使用人	サレル	超時	役職・役割

		意味関係	アスペクト	熟語の意味
E	筆頭人	ノ		役職・役割
	貧乏人	ナ・シテイル	結果状態	属性者

Eという例外はあるが、それ以外はすべて用言語基が、それぞれの〈動作〉の局面を表すアスペクト的結合関係を有し、それと相関する熟語の意味を形成していることが明らかになった。Eの中では、貧乏人の特徴はジンの場合に近く、例外扱いせざるを得なかったが、筆頭人・名義人は、上接語が用言語基ではないが、役職・役割を表す語を形成するためにニンと読まれた可能性を考えた。

③ジンは、体言語基と結合して、その人の属する〈場所〉〈(活動）領域〉〈時〉をあらわす。また、相言語基や用言語基と結合して、〈状態〉を表す。ジンが形成する熟語は、いずれの語基であっても、社会における、ある種類や時代・層に所属する人や集団をあらわす。

用言語基が〈状態〉を表す意味になる場合もあるということを付け加えた。帰化人・渡来人などは、用言語基として「シタ／シテイル」の意味関係で結合しているが、二語とも〈結果の状態〉から、属性を表す意味に移行して、相言的に「人」を修飾しているという点でジンにふさわしい。

一方、読書人は用言語基だが、社会における一定の層に属する人を意味させるために、ジンと読まれた可能性を考えた。

まとめの②③は、規則として十分に言えることだが、これにあてはまらない、いくつかの例外もあった。このことから、語形成の問題は、語基の種類や結合の仕方という形態的な規則性だけでは解決できない点のあることが見えてきた。すなわち、語のメトニミー的意義転移や歴史的変遷を考慮しなければならないこと。また、形態的側面よりも、その語形式全体が持つ優勢的な意味が、実際的な語形成において、影響を持つ場合があるのではないかという可能性を考えることができた。

注

1）③の文章にはやや錯簡があると見られる。まず、どのような語基と結合するかは、すでに②で述べているので、文末の「ジンと結合する語基は、（略）あらわす語基としか結合しない」の傍線部は不要であり、趣旨としては、「ニンと結合する語基はすべて〈動作〉をあらわし、ジンと結合する語基のうち、体言語基は〈場所〉〈時〉〈活動〉〈精神〉を、相言類は〈状態〉をあらわす」ということだと解する。ただし、本文中には原文のままあげる。

2）「立会い」は意味的に動作性を有しており、その点で用言語基、品詞的には「立会うこと、またはその人」（集英社国語辞典）を表わしているので、体言語基と言える。「管理」は「名詞・他スル」（同上）と同辞典にあるように、体用両用語基である。

3）野村 1977 は、「このような、接辞的な用法をもつ」例を、新聞の調査から 3000 例（そのうち数詞につくものが 2400 例）拾い出したという（p.272）。この新聞調査のもとになったのは、野村雅昭「四字熟語の構造」（国立国語研究所報告 54『電子計算機による国語研究Ⅶ』）であるようだが、具体的な熟語はほとんど掲載されていない。よって、対象とした漢語の詳細については不明である。

4）日本国語大辞典によれば、「暇人」の例として、西鶴の「俳諧・独吟一日千句」（1675）第九「ここに中ころ隙人まします　貞徳の俳諧の後さまさまに」の例があげられている。

5）漢字音に複数種類（おもに呉音・漢音）が在るとき、それらが何らかの使い分けをしている例がほかにあるかということだが、ニン・ジンほど明瞭な使い分け今のところ見いだせないように思う。ただし、呉音・漢音のうち一方（棒線を付したもの）が助数詞として使用されて、それが数字と結びつく例（度（ド・タク）、名（メイ・ミョウ））、頭（トウ、ズ））はある。とはいえ、数字と結びつくものが呉音であるとは限らない。また、「便」について、李（2010）は、明治以降、ビンは〈通信手段〉に、ベンは〈都合がよい〉の意味に使い分けが分化してきているという報告がある。

6）広辞苑には「名指し人（指名された人）」の見出しがある。「少納言」では用例が見つけられなかったので、本論中には挙げなかったが、これも受身結合の例である。

7）広辞苑には掲載されているが、「少納言」で用例が検索できなかったものとして、

公議人・公界人・開口人・因果人・荷担人・加判人・公方人・計会人・割引人・最勝人・在庁人・朝夕人・犯科人・留守人・牢籠人・台所人・代務人・辛抱人

検索できても使用範囲が歴史解説や時代小説に偏って見られるもの

往生人・供御人・奉行人・業報人・公用人・在京人・謀反人・介錯人・無足人・天下人（「てんかにん」か「てんかびと」の読みの区別がつかなかった）・代言人・沙汰人・如泥人・地下人・庖丁人

以上は、考察の対象にしなかった。

8）「小作」および次の「指図」は「訓＋音」で純粋な漢語とは言えないが、それに準じるものとして、ここに入れた。また、「小作人」は「小・作人」「小作・人」の二通りの解釈が可能と思われる。ただし、「小作（を）スル」という言葉があるので、後者の解釈をとった。

9）公証スルの例を「少納言」から一例あげておく。

・技能検定は、労働者の有する技能を一定の基準によって検定し、これを公証する国家検定制度であり、（略）（「2004 年版ものづくり白書」）。

10）3 章において検討対象からはずした漢語は、以下のものである。

①広辞苑には掲載されているが、「少納言」で用例が検索できなかったもの

無力人・道化人・念書人・結構人・始末人
福禄人・不当人・無道人・風来人・風雅人
南京人

②検索できても使用範囲が歴史解説や時代小説に偏って見られるもの

色目人・有徳人・不覚人

③今日的にも差別的響きがある語

毛唐人・外省人・本省人・三国人・朝鮮人
内国人

11）〈国〉や〈地域〉の場合は、国名・地域名であれば、語種に関わらずさまざまな語をとることができる。広辞苑にもここに掲載した以外のものがあがっていたが、煩雑になるので割愛している。またカタカナ語が来ることが多いので、漢語ではないが（　）に数例示した。

12）「未亡人」とは、「（夫と共に死ぬべきであるのに、未だ死なない人の意）夫に死なれた婦人。元来は自称の語であったが、後には他人からさしていう語となった」（日本国語大辞典）。

13）また、一人・二人に関しては、現在でも「ひとり」「ふたり」と訓読みすることになっていて、「イチニン・ニニン」とは言わない。

引用・参考文献

森岡健二（1987）『語彙の形成（現代語研究シリーズ 1）』明治書院

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法――改訂版――』くろしお出版

李芝賢（2010）「漢字〔便〕における字音と意味の関係の形成」（漢検漢字文化研究奨励賞佳作論文）

『広辞苑　第六版』岩波書店

『日本国語大辞典第二版』小学館

KOTONOHA「現代書き言葉均衡コーパス（少納言）」
http : //www.kotonoha.gr.jp/shonagon/

例文出典

村上春樹　1988 『ダンス・ダンス・ダンス下』講談社
伊藤比呂美　1999 『居場所がない！』朝日新聞社
浅利佳一郎　2000 『鬼才福沢桃介の生涯』日本放送出版協会
重松清　2000 『リビング』中央公論新社
渡辺和行ほか　2001 『エリート教育』ミネルヴァ書房
経済産業省；厚生労働省；文部科学省　2004 『ものづくり白書 2004 年版』ぎょうせい
石堂秀夫　2004 『懐かしの都電 41 路線を歩く』有楽出版社
以上は KOTONOHA「現代書き言葉均衡コーパス（少納言）」により検索したものである。
織田作之助　1944 「蛍」（青空文庫に拠った）
「『賃貸住宅標準契約書（改訂版）』解説コメント」http : //www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/torikumi/keiyakushocomment.pdf（最終確認 2014/12/22）